



くるまざカフェ
ふくしま
みちさがし
2019



いま、そして未来へ、何ができるのか？
みんなで一緒に考えてみませんか



日時：2019年2月23日(土) 13:00～16:30 (開場12:30)

会場：コラッセふくしま 4F多目的ホール (福島県福島市三河南町1番20号)



はじめに

震災からまもなく8年が経過する福島。

様々な地域・分野で一步ずつ日常を取り戻す取組みがなされています。

「ふくしま“みち”さがし」では、その地を訪れてきました。今回は、浜通りの浪江、富岡、楡葉の“みち”を探しました。

そこでの気づきを多くの方と共有し、これから進んでいく“みち”をみんなで考えていきます。

みんなで考えるイベントは、2015年から毎年実施しており、今年で5回目になります。

* “みち”とは、これまで知らなかったことの“未知”と、これからの福島の“道”の意味。
くるまざカフェ企画は2013年よりはじまり、くる、まざる等の意味が込められています。

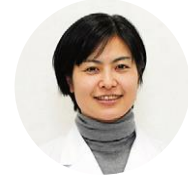


プログラム

【第1部 トークセッション】

昨年の10月と11月に開催されたふくしま“みち”さがし体験プログラムを通して、現地を巡り感じた気づきをみなさまと共有します。

テーマ①「避難指示解除後の暮らしを知る」
ファシリテーター：越智 小枝さん
東京慈恵会医科大学臨床検査医学講座 講師



テーマ②「地域産業の再生の可能性を考える」
ファシリテーター：開沼 博さん
立命館大学衣笠総合研究機構 准教授



【第2部 ワークショップ】

4つのブースに分かれ、来場者のみなさまと一緒に、「未来に向かって、今できることは何か？」を考えます。



体験プログラムについて

昨年2018年10月と11月に、その土地を訪れて知り、これから進んでいく“みち”と一緒に考える体験プログラムを実施しました。

「浪江から避難指示解除後の暮らしを知る」1泊2日バスツアー

日程 2018年10月7日(日)～8日(月・祝)

1日 10月7日(日)

📍 福島駅(西口バスターミナル 出発)

📍 報徳庵(相馬)

●昼食(相馬の魚)とふくしまの魚の現状を知る

📍 厩舎みちくさ(南相馬)

●被災動物(馬)のあれからその取組を知る
●牧草生産者の取組を知る(相馬牧場へ案内)

📍 請戸漁港・小学校(浪江)

●大平山公園～請戸地区を訪問
漁協関係者から請戸のいまを知る

📍 石井農園(浪江)

●浪江の特産食材を目指す
エゴマの収穫体験

📍 いこいの村なみえ(浪江)

●宿泊
避難している方々もいつでも戻って来られる場所
夕食は浪江ともゆかりのある川合精肉店の
川合達也さんによるライブBBQ

2日 10月8日(月・祝)

📍 いこいの村なみえ 出発

※朝食はまち・なみ・まるしえキッチンランマにて

📍 OCAFE(浪江)

●避難指示解除後に必要な場所を紙芝居を通して知る

📍 あおた荘(浪江)

●誰でも集える場としてゲストハウスを訪問

📍 いこいの村なみえ

●昼食
震災後の浪江の復興に関わった方々からのお話と交流
■インタビュー:中村天海さん ■元浪江町役場:玉川啓さん
■浪江町役場:小林直樹さん ■(一社)まちづくりなみえ:菅野孝明さん
●振返り

📍 福島駅(西口バスターミナル 解散)

ナビゲーター



越智 小枝さん

医学博士
東京慈恵会医科大学

ガイド



小林 奈保子さん

任意団体
なみとも

詳細は
P3へ

浜通りから知る「地域産業再生の可能性」1泊2日バスツアー

日程 2018年11月10日(土)～11日(日)

1日 11月10日(土)

📍 郡山駅(西口ターミナル 出発)

📍 富岡町(富岡)

●夜の森桜並木道～富岡駅周辺を巡る

📍 企業訪問(富岡)

●富岡町内に本社を置く測量設計会社(株)ふたばを訪問

📍 えびす講市(富岡)

●昨年富岡で復活したえびす講市にて昼食(各自)

📍 富岡文化交流センター(富岡)

●地域産業再生の可能性について
(株)ふたば 遠藤秀文さんと交えてトークセッション

📍 とみおかワイン葡萄栽培クラブ(富岡)

●園場見学

📍 Jヴィレッジ(杓葉)

●宿泊
震災前、震災直後、これからのJヴィレッジを知る

2日 11月11日(日)

📍 Jヴィレッジ(杓葉)

●施設見学(4階展望室～フィットネスジム～ピッチ～全天候型練習場)
グラウンドキープについて知る

📍 さつま芋畑(杓葉)

●芋ほり体験を通じて新たな農業再生について知る

📍 ならはCANvas(杓葉)

●昼食:お弁当
ならはCANvas見学

📍 木戸川(杓葉)

●鮭のやな場見学
今年の鮭の遡上はどのような状況か知る

📍 リプルンふくしま(富岡)

●施設見学と振返り

📍 郡山駅(西口ターミナル 解散)

ナビゲーター



開沼 博さん

社会学者
立命館大学衣笠総合研究機構
准教授 福島大学客員研究員

ガイド



佐々木 邦浩さん

富岡町役場産業振興課
職員

詳細は
P13へ

「浪江から避難指示解除後のくらしを知る」

日程：2018年10月7日(日)～8日(月・祝)

行程：福島市→相馬市→南相馬市→浪江町→福島市



ナビゲーター



越智 小枝さん

医学博士
東京慈恵会医科大学

ガイド



小林 奈保子さん

任意団体
なみとも



「相馬の魚は美味しいね」といってもらえることが、続けていく原動力になっています。

水産仲卸業を営む飯塚商店（屋号：丸合水産）三代目の飯塚哲夫さんからお話を伺いました。原釜港を拠点とした仕事や、地元相馬への想い、本格操業ができない試験操業の中でも一般入札が再開された現在の状況や未来への想いなどを、参加者のみなさまからの活発な質疑応答を交えながら、普段聞くことができないお話を伺いました。

昼食は、市内のはまなす商店街にある「喰う処 報徳庵」にて、相馬で獲れたアジのフライ、カレーの煮つけをメインに、ご飯も相馬で収穫されたお米を使用した「相馬」づくりの定食を美味しくいただきました。

参加者の声

まだ厳しい状況の中、打開策としていろいろ仕掛けしている様子に頼もしさを感じました。そのバックグラウンドに、地元への愛着と誇りがあるということがとても伝わりました。
(宮城県50代男性)

相馬の魚は本当に美味しいと、自信とプライドを持っておられることが、お話から伝わってきました。「食べるものに想いをのける」という言葉がとても印象的でした。
(福島県50代女性)

消費者と直接結びつく「食べる通信」の取り組みや「結局、人」という飯塚さんの言葉が印象に残りました。
(東京都50代男性)

南相馬市

厩舎みちくさと 相馬牧場



牛や馬と向き合いながら一歩前に向かっていく方がいます。

きゅうしゃ

厩舎みちくさでは、様々な事情から被災した馬たちを預かっています。これまでの取組み、現在の状況、飼い主さんの思いなどを伺い、獣魂碑に祈りを捧げました。お話を伺った後は、馬やポニーへの餌やりを体験しました。

震災前には180頭の牛を飼っていた相馬牧場では、酪農をあきらめる一方で、餌となる牧草の栽培を始めたこと、新たな取組みとして羊を飼い始めたことなど、少しずつ前を向いて歩んでいる現在の状況を伺いました。

参加者の声

厩舎みちくさで見た獣魂碑に書かれていたことは全くその通りで、動物と暮らしていた方々のお気持ちを思うと言葉も出ません。今、力強く前を向いてお話を伺ったお2人は、ここに至るまで大きな決断をしてこられたと思います。ご自分で決めた道を歩んでいるお2人から力を頂きました。
(福島県50代女性)

避難するために連れていくことができず残していかなければならなかったことは、自分の子供を手放したように断腸の思いだと思います。その可愛い馬たちを育てられなかった馬主さんたちの気持ちは如何ばかりだったかと思いました。
(福島県70代女性)

相馬牧場の旧牛舎では、羊が飼われていましたが、まだ数が少なく、今後、これが何百頭の大きな羊舎に成長する姿を夢見ています。牧草地も含め頑張ってください。
(福島県60代男性)



被災した請戸地区への鎮魂と、風評払拭に向けた請戸漁港の取組みへの想い。

東北地方太平洋沖地震により発生した津波は、浪江町で15メートルの高さに達しました。浸水した浪江町請戸地区、中浜地区、両竹（もろたけ）地区、棚塩地区では、津波によりほぼすべての建物が全壊、多くの死者・行方不明者が出る被害をもたらしました。

大平山霊園では、浪江町の被災者の約6割を占める請戸地区を見ながら、請戸小学校の児童、職員全員が大平山へ避難した時の様子や、避難のため行方不明者の捜索を中断しなければならなかった無念の想いをお聞きました。

請戸漁港では、現在行われている試験操業や魚の放射性物質のモニタリング、請戸漁港での本格操業による水揚げの展望などについてお話を伺いました。

参加者の声

大平山は初めて行きましたが、請戸小学校や海もよく見えて、当時の小学校の生徒さんと先生方が大平山に逃げた賢明さがよく実感できました。
(福島県60代男性)

大平山は小学生が避難して助かった山だと同じ、常日頃からの訓練・判断力の大切さ、昔からの言い伝えなども先輩から良く伺っておく必要性を感じました。
(福島県70代女性)

請戸小学校の児童、職員全員が避難し助かったことが本当に良かったと思いました。避難するという決断をしたことが本当に素晴らしいと心から思いました。大平山から請戸漁港を見渡せたり、漁協のお話を伺うことができたり、個人ではなかなかできないことを経験出来て良かったです。
(福島県50代女性)



浪江町

石井農園



みんなでエゴマを作り、みんなで笑顔になり、健康になろうとはじめました。

石井さんがエゴマ作りをはじめたのは、地元の人たちを元気にしたいという想いから。仮設住宅や復興住宅に
いる地元のおじいちゃんやおばあちゃんたちを誘い、小遣いの稼ぎになればとエゴマ油だけではなく、エゴマの
ジャムやラー油などの加工品を作り販売しています。浪江でエゴマの作付けをはじめたのは3年前。最初は2反
歩からはじめ、1町歩、2017年には2町歩 さらに福島飯坂で1町歩増やし、いまでは合わせて3町歩を作付け
しています。今後はもっと作付けする方を増やしたいと話されていました。



参加者の声

石井さんの明るさ、エネルギー、
バイタリティが素敵でした。こう
いった方々が浪江の強さになっ
ているのだと思います。楽し
みながら事業としても着々と育
ててらっしゃるのも素晴らしいと
思いました。エゴマの収穫が楽
しい体験でした。

(宮城県50代男性)

浪江と福島にもエゴマの花を
咲かせ、それをもっともっと広
げようと努力される石井さん
の姿は私達の鏡です。是非、
地元の復興のため見通しの
明るい事業を拡大して明るい
浪江地区にしてください。

(福島県70代女性)

えごま油に行きついた発
想と力に移行できるパ
ワーを持った方に会えてワ
クワクした。”浪江みちの
駅”の売りになると大いに
期待!!人気商品になると
思います。

(神奈川県60代女性)

浪江町

いこいの村 なみえ

福島いこいの村なみえは、浪江町民の方がいつでも町に帰ってこれよう「くつろぎと安心」「集いの場」を提供する宿泊機能を備えた施設です。「町の復興」「観光まちづくり」「交流人口増大」の発信拠点として、町民以外の方も宿泊、利用ができます。2018年6月20日（水）にフルオープンしてから、あたたかい大浴場とフレッシュなお部屋、そして緑に囲まれた静かな環境に加え、懐かしく温かいふるさと浪江を感じて、くつろぐことができます。



夕食は、田村市常葉町で川合精肉店を営み、日本バーベキュー協会上級インストラクターの資格を持つ川合達也さん（たっちゃん）によるライブBBQを堪能しました。

ライブBBQとは、ただ焼くだけじゃない、素材と楽しさにこだわったお肉屋さんの本格BBQで、お肉や野菜を「大胆に」「豪快に」焼き、素材の持つ旨さを伝えながら、LIVE感のある「美味しい」「楽しい」時間を提供していただきました。



浪江町

まち・なみ・まるしえ キッチン・グランマ

「まち・なみ・まるしえ」にあるキッチン・グランマは、浪江町の皆さんに元気になってほしいとの想いから、週4日、福島のお米を使った定食とお弁当の販売をしています。

お店の名前は、平均65歳のおばあちゃんたちが営んでいることからつけられました。これまで仮設住宅のおばあちゃんたちが作ってくれたかぼちゃ饅頭やシイタケご飯などを「美味しい！」と言ってごちそうになると、笑顔と元気になるのを目の当たりにしたことがお店を開くきっかけでした。こうしたおばあちゃんたちと一緒に

やれるかもと一念発起し、食堂を開店しました。今回の体験プログラムでは、心がこもった朝食を美味しくいただきました。





居場所がなくなってしまった浪江に、みんなが帰る場所を作りたい。

震災後、生まれ育った浪江町のために何かしたい、でもそれが何か分からなかった、そんな時に震災にあった浪江消防団を描いた「無念」という紙芝居に出会って、自分のやりたいことが見つかり、居場所ができたという岡さん。震災から避難に至るまでの状況、避難後に浪江に戻ってきた時のこと、O CAFE(オ カフェ)を作った想いなどを伺いました。O CAFEでは、紙芝居「無念」と浪江町の昔話である紙芝居「歯型の栗」を演じていただきました。紙芝居の合間には、コーヒーコーディネーターである娘さんが淹れたコーヒーと岡さん特製のお惣菜を美味しくいただきました。

参加者の声

岡さんの紙芝居の語りが素晴らしく、震災当時の限界を超えた厳しい状況に想いを馳せました。本やテレビではかなわない、生で演じられる物語の力を感じました。一言一言が途方もない重みを感じました。

(東京都50代男性)

O CAFEにかける期待を知って、故郷にかける情熱だと感じ、いつまでも残してほしいと思いました。2つの紙芝居も実際に体験された話なので、後世に伝えていって欲しいと強く思いました。

(福島県70代女性)

元の住まいには帰れない状況ながら、Cafeという形で自らと家族の拠り所を築き、それをととても自然な形で地域の活力にも繋げられている様子に感銘を受けました。また、訪ねてみたいと思いました。

(宮城県50代男性)

浪江町

ゲストハウス あおた荘



人が集まれる場所がないと何も始まらないし、何も生まれない。

ゲストハウスあおた荘は人が集える場所です。管理人である和泉さんから、福島市に避難されていた浪江町の方々のコミュニティづくりのお手伝いをしていたときのお話や、いろんなボランティア活動やイベントに参加していたときのお話を伺いました。

これまで見てきた課題から人が集える場所の必要性を感じ、住民と若い人（学生やボランティアなど）が交流をしながら、コミュニティスペースを兼ねた宿泊ができるゲストハウスとして、「ゲストハウスあおた荘」を作りました。現在は、浪江に関心がある若者と町民の方々を繋げて、やってみたいことを実現していくお手伝いをしているとのことでした。



参加者の声

和泉さんや小林さんの若いお二人の話を聞いて、新しい若い人達の移住が、これからの浪江町を支えていくのではないかと感じました。また、大学生やボランティアの熱意などからも支えられていくことでしょう。
(福島県60代男性)

どこにもなかった居場所を、若い皆さんで作って上げ、良い感触を得られておられるとのこと、これから5年、10年、20年と長いスパンで対応することで、大きな成果が得られることは間違いありません。また寄せていただきます。

(福島県70代女性)

若い人達が、浪江に魅力を感じて移り住み、生き生きと活動されている様子を嬉しく思いました。反面、ボランティアの方の宿泊所がなかったり、賃貸物件がないといった話を聞き、行政のサポートが必要と感じました。

(宮城県50代男性)

くるまざ と 振り返り

くるまざでは、福島県庁総務部主幹兼総務課（元・浪江町復興推進課）の玉川さん、浪江町役場産業振興課産業創出係の小林さん、浪江町役場産業振興課商工労働係（一般社団法人まちづくりなみえ事務局次長）菅野さんをスピーカーとしてお迎えし、参加者の中村さんが高校生インタビューとして、行政職員という立場から、震災当時の対応や想いを交えつつ、浪江町の復興にける取組みや現在の状況を伺いました。



その後は、参加者を交え、今回の体験プログラムや今後の浪江町について、みんなで意見を交換しました。



参加者の声

今回参加できて本当に良かったと思います。

大平山から海を眺める。あの請戸港をのり越え津波が建物や田畑を飲み込み全面海になったこと、残骸となった廃屋を目にしたこと、押し寄せる津波の実感が伝わってきました。6 Km先に原発所があります。これが“事”のはじまり。この光景を目にする事ができて良かったと思います。小高駅に立ち寄り、以前は閉鎖されていた駅に列車が走っている、駅の駐車場に自転車がいっぱい止めてあったこと、ささいな事です、少しは前に進んでいるのかといううれしくなりました。

（神奈川県60代女性）

復興を考える上でカギとなるソフト面を担う多くの人材に話を聞くことが出来る貴重な機会をいただきました。自分の考えをまとめて、どこかで発信していきたいです。（東京都50代男性）

私は初めて福島に来ました。地震から約7年経ち浪江町に来てビックリしました。涙が出ました。人が居ない事、家がそのままになっている事、自分の目で見られた事が良かったです。（60代女性）

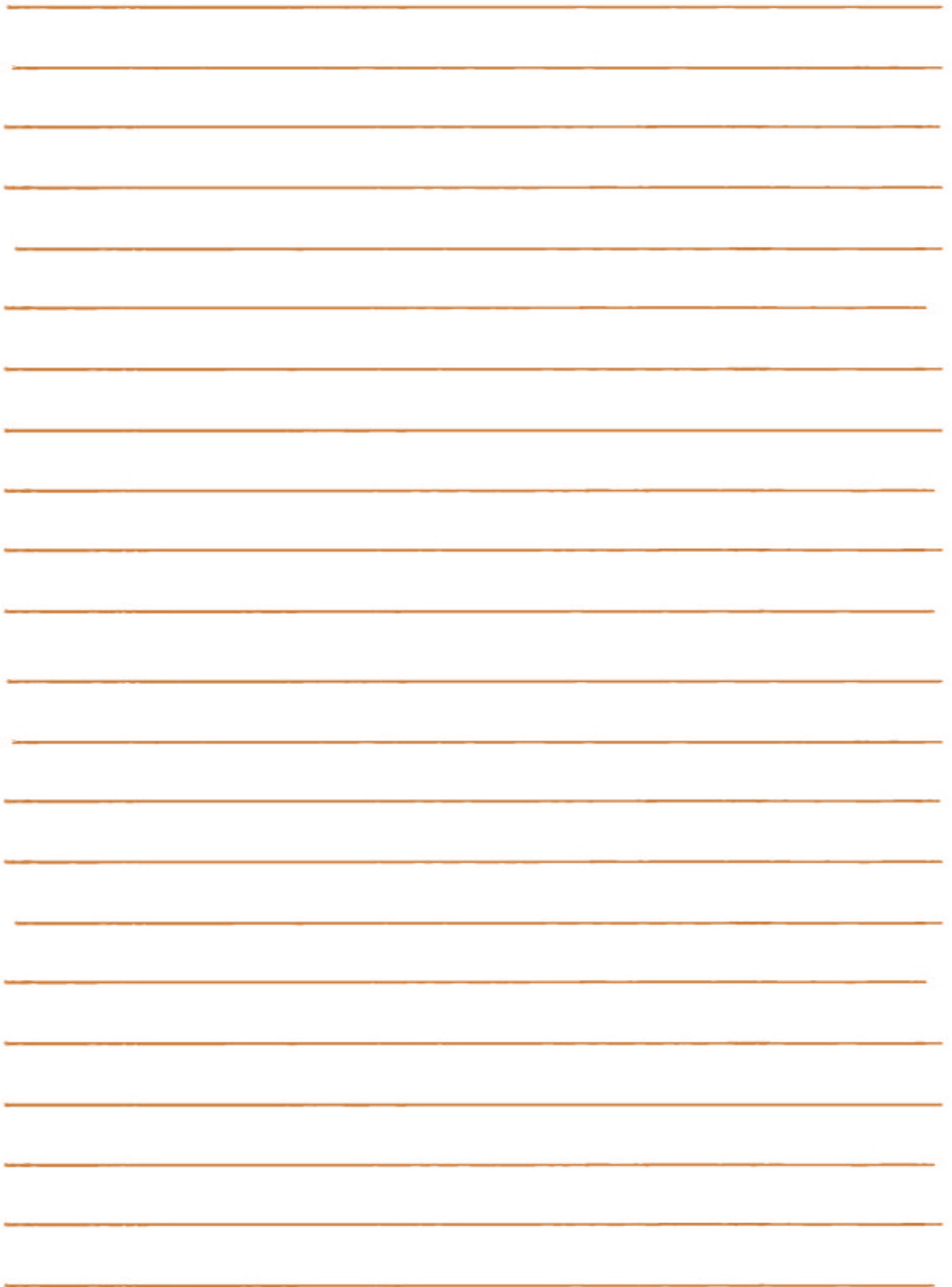
初めての浪江でしたが、元気で頑張っておられる方々にお会いし、力強く思いました。参加者とも交流でき有意義な2日間でした。機会が有ったら又参加したいです。（福島県60代男性）

浜通りには何度も来ていますが、知らないことや見たことがなかったものに触れることができました。（埼玉県40代男性）

とても充実した時間を過ごすことができました。避難解除後の檜葉町や富岡町には、帰還住人が少ないと言われている中で、今どうなっていて、これからどうなろうとしているのかを、知ることができて良かったです。今後も見続けて行きたいと思いました。

（福島県60代女性）

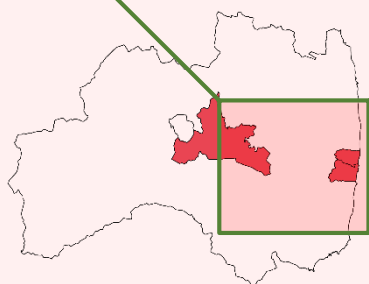




浜通りから知る「地域産業再生の可能性」

日程：2018年11月10日(土)～11日(日)

行程：郡山市→富岡町→檜葉町→広野町→郡山市



ナビゲーター



開沼 博さん

社会学者
立命館大学衣笠総合研究機構准教授
福島大学客員研究員

ガイド



佐々木 邦浩さん

富岡町役場産業振興課
職員



富岡町

夜の森桜並木
と
富岡駅周辺



富岡のいまを知る～夜の森の桜並木とJR富岡駅周辺～

桜の名所、夜の森の桜並木周辺を見学しました。桜並木は約2.2キロにわたって続いており、その多くは帰還困難区域に指定されているため、今なお立入が制限されています。

その後、富岡駅に移動。駅は津波で被災しましたが、売店や食堂が併設して再建され、2017年10月に運転が再開されています。この日も常磐線から降りてくる人の姿がありました。駅の裏側では防潮堤、防災林、浜街道など、津波等の防災・減災に向けたハード整備が今なお途上の状況にありました。



参加者の声

夜の森桜並木で歩行者の目の高さに枝が伸び放題になっていることに気づいた。復興の途中にいたことが感じ取ることができたが、35年にバリケードが解除されるということなので確実に進んでいることが分かった。春になり、桜が満開になったときに来たいと思った。

(福島県10代男性)

テレビの中でしか見たことがなかった“立ち入り禁止区域”の看板を実際に見て、あらためて現実だったのだと感じました。美しく作り直された富岡駅や新しくつくられる道路を見て、これからの未来がどうなるか、また来てみたいと思いました。

(東京都30代女性)

南北に広がる浜通りの方々にとって、その結び手として発展してきた富岡町の復興はとても大切なことだとお話を聴いてよくわかりました。富岡駅前にも地元有志のホテルが建つなど一歩ずつ進んでいる状況があり、嬉しい限りです。帰還率5%という富岡町の仕事おこしが進むことが待たれます。

(東京都60代女性)



富岡町

株式会社ふたば

富岡駅の近くに本社がある株式会社ふたば。

社屋は富岡町の木で建築しました。代表取締役の遠藤秀文さんは、建設コンサルタントを経て、2007年に故郷富岡にUターン。東日本大震災を経て、これまでどのような歩みで会社や事業を再開したか、また環境保全や地域の再生をどう進めるか、これからの展望についてお話を伺いました。

富岡町

えびす講市



富岡町の秋の伝統行事「えびす講市」は、五穀豊穡や商売繁盛を祈願するお祭りです。1923(大正12)年に始まり、震災以降中断していましたが、富岡町の復興を願う多くの地元住民や全国からの支援の声を受けて、2017年11月に7年ぶりに開催しました。2018年は、みんなで「つくる」えびす講市。参加者は、思い思いに飲食ブースで昼食をとり、合唱のステージや参加型コーナーなどのいろいろな催しに参加されました。



参加者の声

富岡町民の熱い想いが感じられました。来場されている方々も復興を願う気持ちで参加されていることを感じることができました。

(福島県60代女性)

屋台もたくさん出ていて、いろいろな催しが行われていたので楽しかったです。ただ、見渡すと若い人はとても少なく、これから若者がもっと自主的に富岡のために何かできるか、何をすべきかなどを考える必要があると感じました。お昼に食べたいそべもちや、極上プリンにはいつも食べている物の何十倍、何百倍もおいしかったので、もっと多くの人たちに食べてもらいたいです。

(福島県10代男性)

地域の方にとって大切なえびす講市の復活、うれしく思います。地元企業の出店もあり、堪能できました。今後、まちに若い世代が戻り、子供たちの笑顔があふれるえびす講市になることを願います。

(福島県40代女性)



トークセッション 地域における産業再生の 可能性について



トークセッションでは、開沼博さん、佐々木邦浩さん、遠藤秀文さん、そして参加者を交え、「地域における産業再生の可能性」についてクロストークを行いました。

遠藤さんからは、富岡町内で有志で進めているぶどう栽培・ワイン造りの取り組みと展望について、佐々木さんからは、廃炉産業のほか、ツーリズム・防災教育などソフト分野での可能性について、遠藤さんからは、廃炉後の地域の将来像という長期的な視点で考える必要があるとのお話がありました。

参加者の声

地域の再生の目指すところの難しさを感じました。漠然としたものでなく明確な未来の姿を示すことは行政の役割だと思いますが、先が見えない現状では明示できないのも納得できます。10年後のために今が踏み張りどころだと思います。
(福島県40代女性)

社会コンサルタントを目指すと言われた遠藤さんが、福島から世界に新しい街づくりを目指したいと意欲を持って「志」高く話をして下さったのが印象的でした。佐々木さんも将来を見据え、行政だけで出来ることは限られている。民間のやる気を支援したい、という姿勢は素晴らしいです。
(東京都60代女性)

震災があったことは不幸なことであつたけれど、そのことによって新たに生み出せたり、チャレンジする事ができているという言葉にとっても納得しました。遠藤さん、佐々木さんをはじめ現状にしっかり向き合ってチャレンジしている姿を見て共に参加したいと思う若い人、年配者も含めて増えると良いと思いました。
(福島県60代女性)



富岡町

とみおかワイン
葡萄栽培クラブ



ワインから始める魅力ある町づくりと地域再生。

とみおかワイン葡萄栽培クラブの遠藤秀文さんは、町の有志と共にワイン用葡萄を栽培されています。高齢者でも栽培を通して生きがいを感じられるように、ワインを飲みながら地元の魚を食べるなどで地域の良さを実感できるようにして、少しでも地域再生に貢献できたらと話されました。

参加者は、富岡町の太平洋を一望する小高い丘にある葡萄畑を見学し、素晴らしい景色に感激しながら、今後葡萄畑になる場所の木や石を拾うお手伝いをしました。



参加者の声

簡単ではないことに果敢にチャレンジする姿に感銘を受けました。避難している所から2時間かけてぶどうの世話を続けるのは大変ご苦労だったと思います。下草刈りなどボランティアで関われることに喜びを感じる方も多数いらっしゃると思うので、今回のようにどんどんスタディーツアーに組み込んでもらいたいです。

(福島県40代女性)

季節的な問題もあり、実か葉は見る事ができませんでしたが、景色が良く、とても良いところでした。木や石を拾う手伝いを体験しましたが、今後その場所にぶどうが植えられると思うと楽しかったです。あの畑で育ったぶどうを使ったワインを成人したらぜひ飲みたいです。

(福島県10代男性)

本当に大変と思いますが、ボランティアなどもこの場所に来れば、楽しく応援可能と考えます。機会を作り再訪したいと思います。

(福島県60代女性)



また賑わいを取り戻したい。原発事故収束の対応拠点から、Jヴィレッジ再開とこれから。

Jヴィレッジの小野専務から、これまでとこれからのJヴィレッジについてのお話を伺い、施設内を見学しました。お話では、事故収束の拠点時、サッカーグラウンドは駐車場や作業場、作業員の宿舎などになっていましたが、2018年7月にトレーニング施設として再始動しました。2019年4月には駅も開業し、グランドオープンを予定しています。また今後のメディカルセンター再開についてのお話もあり、スポーツを通して地域の健康づくりに寄与する可能性についてなど、参加者と意見を交換しました。

参加者の声

素晴らしい施設に驚きました。県民や企業が積極的に活用できる施設だと思います。浜通りの復興の拠点としてだけでなく、観光の拠点として、ぜひ来年4月以降にJヴィレッジ駅を活用して、また来たいと思います。
(福島県60代女性)

Jヴィレッジがサッカー施設としての本来の機能を取り戻したことを嬉しく思います。サッカー以外のイベントも多種多様に企画されていて、新生Jヴィレッジの可能性を感じました。一般の方にも広くお知らせし、地域から愛され人が集う復興のシンボルとなることを期待しています。
(福島県40代女性)

Jヴィレッジが再開してほんとうに良かったです。これまでのJヴィレッジが果たしてきた役割に初めてふれました。これからの福島の復興にとってなくてはならないものであり、とても大きな役割を担って行ける施設だと思います。スポーツを通して、県民をはじめ多くの人の健康づくりに寄与できる施設として発展してほしいと思っています。
(福島県60代女性)



地域再生として、新たにサツマイモの栽培に取り組んでいます。

担い手の高齢化や後継者の不足、作付けされない農地の増加などが全国的に課題になっている中で、檜葉町では、新たな作物としてサツマイモ栽培を奨励しています。栽培を進める(株)しろはとファームの内田政樹さんからお話を伺いました。檜葉町には、サツマイモの栽培に適した農地が多くあり、今年の収穫は順調で、今後はさらに栽培面積を増やしていく予定とのことです。

体験プログラムとして生産現場であるサツマイモ畑を訪れ、芋掘りを体験しました。参加者みんなで、童心にかえり、土の感触を確かめながら、楽しい時間を過ごしました。

参加者の声

宮崎県から移住された方が、薩摩芋を本格的に作ろうという姿に感激しました。芋掘りの機械を目近に見ることができ、貴重な体験でした。
(東京都60代男性)

これからの農業のカたちを見させていただきました。加工業者に買い叩かれる農業ではなく、一緒に取り組む農業、しかし、それは農業者だけの努力では難しいです。檜葉町の取組みと実績が、他の町村にも広がってほしいです。
(福島県60代女性)

檜葉町から未来の農業を発信するという思いに、胸を打たれました。逆転の発想で、原発事故を経験した福島だからこそできることがあるという、希望と無限に広がる可能性を感じました。
(福島県40代女性)



町民の想いをもとにつくられたみんなの交流館です。

みんなの交流館 ならはCANvasは、お茶飲みワークショップを何度も続け、そこで語られた町民の想いをもとに設計された施設です。「人が集まり、みんなが出会い、交流する場」「まちの目印、復興の象徴となる場」「檜葉らしさ、情報、震災の記憶を発信する場」「町内外、世代を問わず一人でも誰とでもゆっくり過ごせる場」として、檜葉町の方だけでなく、地域、世代を超えて、活用されています。

参加者は、施設の説明を受けながら見学をし、温かい陽だまりの中、昼食をいただきました。



参加者の声

町民とワークショップを通して出来上がった施設、そのプロセスがいいですね。帰還した人、しない人、迷っている人のそれぞれの立場をリスペクトしながら「悩んでもいいよ」「迷ってもいいよ」と受け止めてくれる場所・施設だと思いました。
(福島県50代女性)

一人一人が全力で“ならは”を再びもり上げようとしている気持ちが伝わってきました。世代に関係なく利用できる施設は数少ないと思います。そのような場を作ることによって昔の話を聞いたり、今こうなっているのだと話したりできるので良いと思いました。
(福島県10代男性)

開放的でぬくもりのある造りで希望が感じられました。世代間交流できる場として今後たくさんの人が集まる場になってもらいたいです。

(福島県40代女性)



森、川、海がもたらす恵みを活かしながら地域再生を目指しています。

檜葉町にあり、阿武隈山地を水源として太平洋に注ぐ木戸川は、震災前、7万～10万匹のサケが遡上する本州でも有数の川でした。当日は、木戸川漁業協同組合によるサケの合わせ網漁を見学しました。

ふ化場長の鈴木謙太郎さんによると、震災後の2011年からしばらくは、稚魚の放流ができなかったそうです。2018年は、遡上したサケは確認されたもので6147匹とのことで、自然ふ化で命を繋いできたものです。2015年度から放流を再開し、今年は3百万匹ほど。サケが生まれ故郷の川に戻るまで4～5年、帰ってくるのはおよそ0.5%。美しい木戸川の自然環境とサケを大切にして、地域再生が進められています。



参加者の声

合わせ網漁を見せていただき感謝です。漁師さんと漁協のこの7年間の苦労と努力に頭が下がります。サケの回復はもちろん、若い後継者が育って益々サケ漁が活発になることを期待しております。
(福島県60代女性)

鮭が元の川に戻ってくる様子を見ることができて感激しました。木戸川の鮭の遡上は浜通りの大きな魅力です。「見て感動」「食べて感動」というのが素晴らしい組み合わせですね。
(東京都60代男性)

初めて漁をやっている所を見ました。間近で見た鮭は、歯が鋭く実が引き締まっていて、子孫を残すため、生きるために必死なのだなと感じました。漁は高齢な方が行っていたので、それを継ぐ若い人が必要だと感じました。しかし皆、歳を感じさせないくらい元気でこれからも若い人に負けない様頑張っていってほしいです。
(福島県10代男性)

富岡町

リプルンふくしま

2018年8月にオープンした特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしまを訪問しました。

特定廃棄物埋立処分事業について、処分の進捗状況やモニタリング結果、安全を確保するための取組みなどの最新の情報について解説を聞きながら、様々な展示物を見たり触れたりしながら、理解を深めました。



振り返り



参加者のみなさんで3つのグループに分かれ、今回の体験プログラムについて振り返りを行いました。その後、グループの中で話されたことを他のグループに発表し、互いに感じたことを共有しました。

今回、参加した理由でもある「どんな状況なのか」「どんなふうに頑張っているのか」を見ることができて満足でした。触れ合った人や場所では、皆さんこの被害や状況に絶望することなく、前向きに取り組んでいることが印象に残りました。今までは他人事として考えていた富岡や双葉や楢葉の景色を見たことで、これからは自分ができることはなるべくしたいと思いました。

(福島県10代男性)

原発付近の浜通りの現状をまったく知らなかったのも、とても良い経験になりました。体験型の見学も多く、実際に触れることができたのは、記憶にも残りやすく、何より新たな発見が得られとても良かったです。

(福島県10代男性)

被害に会っても、キラキラしている人や場所、モノがたくさんある。そんなことを”みちさがし”させていただいた。福島県の課題は、日本中が抱えている課題。「社会コンサルティング」「社会貢献」、この精神を日本中に広めたいです。

(千葉県50代女性)

初めての参加のため、多少不安がありましたが、参加して本当に良かったと思います。テレビ等により、浜通りのことは知っているつもりでしたが、現地に来てみて自分の目でみることで、改めて、今後も継続して来ることが重要であると思いました。

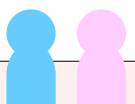
(福島県60代女性)

ぶどう畑での作業や芋掘り体験など、感覚を伴ったプログラムが満載で、より記憶に残る有意義な2日間となりました。地域再生のために頑張る方々のお話が聴けて、熱量を肌で感じる事ができ、とても刺激になりました。学びの機会をありがとうございました。

(福島県40代女性)

浜通りには何度も来ていますが、知らないことや見たことがなかったものに触れることができました。

(埼玉県40代男性)





A series of horizontal orange lines for writing, spanning the width of the page.